

特殊糸の創造者

渡邊 文雄 氏

東和毛織株式会社 会長

あたらしい糸の領域は、
まだまだ掘り起こせる。

我事に於いて後悔せず。

いざ局面に立ってから慌ててはならない。かの宮本武蔵が高弟に遺した言葉である。渡邊会長が荒波のなかを乗り越えて来られたのは、言葉の意味するところを心に刻み、そこに至る以前になすべき準備を怠らなかつたからだろう。

始まりは、1902（明治35）年に祖父が興した毛布の機屋である。そこから30年の時を経て、法人化された渡邊毛織合名会社を継いだのが、父の兄にあたる伯父だった。ただ、時は満州事変の翌年のことであり、日本を取り巻く環境は一段ときな臭くなっていた。1941（昭和16）年、関連企業が集められ、国策として軍の毛布をつくる東和毛織有限公司が設立され、伯父が代表となった。そして暮れには日本軍が真珠湾を奇襲し、後もどりのできぬ戦争へと突入した。

先に待っていたのは無残な敗戦だった。会社は焼け、機械を失い、原料もない。何もかもを失い、集まった10数社は帰るべき場所へと散っていった。絶望のなかで一人、伯父だけが「東和毛織」の名を受け継ぎ、資本を一本化して、再び自分の道を歩き出す。

伯父には子どもがいなかった。甥である渡邊会長を我が子のように育て、東京の大学にも送り出してくれた。だから一橋大を卒業後、しばらく大手紡績会社に身を置いたのち、恩返しをしたい気持ちもあって当時は名古屋にあった伯父の会

社に入った。ただその時期は、高度成長が終わろうとする時期と重なっていた。

1973（昭和48）年のオイルショックのあと、5年後に第2次が押し寄せて倒産と廃業が相次いだ。そこへさらに円高不況が追い打ちをかけた。社長に就任した1988（昭和63）年ごろは、とくにきつかった。毛織物の対米輸出では採算が取れず、5年10年をかけて紡績主体へと舵を切っていく。もはや以前のよきに安いの糸を買って大量生産をし、ありきたりのものを供給していたのでは、やっていけない。もともと付加価値の高い、特殊な糸の開発が求められた。

紡績のポイントは、均質な糸をつくることと同時に、さまざまな糸を生み出すことにある。先代は、高品質ながら回転が遅く非効率な英式紡績機だけでスタートしていた。大量生産向きで効率のよい仏式への転換を進めながらも、かんたんに英式を捨てられない。特別なニーズにこだわるのはもちろんだが、英式でしかできない糸があるからだ。その英式も仏式も自身で改良に改良を重ねてきたものだ。

いまは社長の座をご子息に譲り、これからの繊維業界を背負う若者たちの指導に熱を帯びる。時代はもともとと激しく変わっていくだろう。楽観視できるものは何もない。まさに「事において後悔せず」が問われる日々がやってくる。が、もとより、準備は怠らない人である。

日本を代表するタキシードデザイナー

むね たか
横山 宗生 氏

一般社団法人 日本フォーマルウェア
 文化普及協会 理事長

株式会社マイモード 代表取締役

Tuxedo Atelier ROSSO NERO 代表



だれも歩いていない道を、 歩いていく。

四国の高松に三越がオープンしたのは、1931(昭和6)年のことだった。

祖父はそこで、オーダースーツのデザイナーをしていた。ただ父は、そのまま親のあとに続かなかった。洋服の時代に入り、オーダーが増えていくだろうとの読みが三越との双方にあった。1963(昭和38)年、依頼を受けて父は横山縫製工場を創業。三越専属縫製工場として店内に仕事場を持ち、いまなお続いている。

その父に育てられ、横山宗生さんは国立富山大学の経済学部に進む。卒業後は帰郷して別の会社に勤めていたが、あるときふと、自分で経営をしてみたくなくなった。何をどうしたいというのではない。ただ経営者になりたかっただけだ。

もちろん、両親は入社を拒んだ。時の経過とともに、すでに父の会社は裁断と縫製のみを行う下請工場になっており、顧客の顔が見えず、職人も減っていた。

それでも折れてくれた父は、どうやら生き残れるかは自分で考えろ、と言った。代わりに、やりたいことはすべてやらせてくれた。横山さんは工場に併設して、オーダーショップ MY MODE(現 ROSSO NERO)を立ち上げる。

翌2000(平成12)年のことだった。各国の青年会議所の次期会頭が集まる国際アカデミーが高松で開催された。最後の夜、ブラックタイ指定のガラディナーに出席して、愕然とした。隣にいた外国人はオスカー・デ・ラ・レンタのタキシードを着ていた。その格好のよさに息をのんだ。自分が身につけていた名ばかりのタキシードが目につけていた。おなじものがこれほどに違うのか。自分も着たい、作りたい、売りたい。進むべき方向が、一直線に見渡せたときだった。

それからは小売りだけでなく、結婚式場などのプライダム業界に卸すことも始めた。安価で手軽なものから、デザインを吟味した質のいいものにシフトしていった。不思議なことに、東京からの注文が増えていた。それを背景に、2008(平成20)年、東京青山に進出した。

あれから12年。いまでは、最高峰のホテルであるザ・リッツ・カールトン東京やザ・ペニンシュラ東京、和倉温泉加賀屋、ジョエル・ロブションのプライダム運営会社など、そうそうたる取引先が扱ってくれている。

氏はここまで、毎年のように新作をつくってきた。その過程でスタイリストたちの評判を呼び、信頼も得て、年間100人以上の芸能人やモデルに使用され、彼の作品はときにグラミー賞やアカデミー賞の授賞式にも出席している。

たくさんの人が日本を訪れ、たくさんの日本人が外に出ていく時代である。どこにいても、心豊かな人生を知る、輝く人であってほしい。なにより、そうしたお手伝いをしたい。その先に、世界一のタキシード専門店が見える。